◎旧朝香宮邸の歴史を訪ねて

連載◆第27回／旧朝香宮邸、外から眺める

Residence of Prince Asaka 1933—

図1

車の往来の激しい目黒通りから一歩美術館の敷地に入るとそこには別世界が広がります。高い木立に囲まれたアプローチを抜けると、旧朝香宮邸・東京都庭園美術館が目の前に現れます。ラリックの扉に誘われるように来館者のみなさんは玄関へと歩みを速めることでしょう。しかし、今回はここでしばし立ち止まっていただき、建物外観を眺めていただきます。

装飾が美しい室内に比べて、外観は一見するとアール・デコ様式というよりも、より近代的なインターナショナル・スタイルの特徴を持っています。インターナショナル・スタイルは、アール・デコの装飾性を非難したル・コルビュジェやミース・ファン・デル・ローエの建築に代表される合理性と機能性を重視するモダニズム建築様式です。

なぜ外観にこのように異なる様式を採用したのでしょう。確かに内部の様式も、1階大客室などの優雅な正統派アール・デコ、2階宮家住居部分の和風アール・デコ、3階ウインター・ガーデンの装飾を抑制した近代的なアール・デコと、多様な表現を採用しています。外観もこうした展開の一環だったのでしょうか。宮邸の建築計画は1929(昭和4)年に始まり1933(昭和8)年に完成しました。世界恐慌や昭和恐慌、満州事変勃発など、社会不安が広がりつつある時代を背景としています。時勢に配慮したという面もあったのでしょうか。竣工記念の晩餐会などは開かれましたが*1当時の新聞や雑誌には宮邸竣工の記事は見当たりません。

ファサード(建物正面)に華やかな装飾を施す典型的なアール・デコの外観は全く排除したのでしょうか。しかし、よく細部を見てみると、南面の妃殿下居間のバルコニーの外側には幾何学模様のレリーフが施されています。建物にエレガントさを加えている窓台のテラコッタ(粗陶器)と同じサーモンピンクです。また通風口のカバーも直線や円弧を用いたアール・デコ・デザインです。正面玄関のある東面床下の通風口には朝香宮家の紋章を連想させる菱形がデザイン化されています。日本家屋の瓦屋根などに家紋が施されるのと同じ感覚でしょうか。抑制された中にも楽しい遊び心が感じられます。

図2

旧朝香宮邸を訪れたなら、じっくりと建物外観も眺めてみてください。きっと新しい発見があるはずです。(高波) ◆

図3

図4

図5

図1. 外観南面(現在)

図2. 南面 妃殿下居間バルコニーのレリーフ

図3. 外観南面(白金プリンス迎賓館時代、昭和57年当時)
オリジナルのシルバーの窓枠がよりエレガントなたたずまいを演出している。*現在の窓枠は昭和58年開館時の改修により取り替えられ濃いブラウンとなっている。

図4. 東面の軒下通風口

図5. 朝香宮家紋章

*1. 竣工記念晩餐会は昭和8年6月10日に開かれた。